

自己有用感を育む支援の在り方

—— 学級の中で児童同士のより良い関わりを促す

「ほっとブック」の作成と活用を通して ——

長期研修員 齊藤 晴代

《研究の概要》

本研究では、児童の自己有用感を育むために「ほっとブック」を作成し、学級活動での活用を図った。学級活動では、事前の活動から本時の活動、事後の活動までを一つのまとまりとして捉え、児童同士のより良い関わりを促す活動を意図的・計画的に設定した。具体的には、自他のよさやみんなのためにできることを見付ける活動、自他のよさを互いに認め合い、賞賛や感謝の気持ちを伝え合う活動、学級での自他の役割を実感できる活動、自他のよさや互いの役割を生かし、発展させていく活動を設定し、継続して行った。このように、児童同士のより良い関わりを促していくことで、児童の承認感や貢献、所属の意識を高め、児童の自己有用感を育んでいけることを実践を通して明らかにした。

キーワード 【生徒指導 自己有用感 学級活動 認め合い 承認 貢献 所属】

群馬県総合教育センター

分類記号：F08-01 平成29年度 263集

I 主題設定の理由

文部科学省は、「生徒指導提要」（平成22年3月）の中で、「生徒指導は(中略) 学校生活がすべての児童生徒にとって有意義で興味深く、充実したものになることを目指しています」と、生徒指導の意義を述べている。また、「自他の個性を尊重し、互いの身になって考え、相手のよさを見付けようと努める集団、互いに協力し合い、よりよい人間関係を主体的に形成していこうとする人間関係づくり」の重要性を述べている。そして、目標に向かって励まし合いながら成長できる集団をつくるのが大切とし、「自己肯定感・自己有用感を培うことができる」集団づくりの工夫が必要であるとしている。

新小学校学習指導要領解説特別活動編(平成29年3月)でも、「特別活動のいずれの活動も、互いに協力し合い、認め合う中で、自分が他者の役に立つ存在であることを実感するとともに、自信を持つ機会となっている」とし、「自己有用感や自己肯定感を体得できるように指導を工夫する」ことが、大切であると述べている。

また、文部科学省の「児童生徒の問題行動等生徒指導上の諸問題に関する調査」（平成28年）では、小学校におけるいじめの認知件数は、平成25年度が118,748件、26年度が122,734件、27年度が151,692件であった。一方、不登校児童数は、平成25年度が24,175人、26年度が25,864人、27年度が27,583人であった。こうした現状から、いじめや不登校を未然に防ぐ取組の重要性が叫ばれている。そして、生徒指導リーフ増刊号「いじめのない学校づくり『学校いじめ防止基本方針』策定Q&A」（平成26年）で、いじめに向かわせない、主に学校で取り組むべき課題として「規律、学力、自己有用感」を挙げている。

本県でも、平成29年度学校教育の指針の中で、「いじめ・不登校等の未然防止に向けた教育活動の充実」を学校経営の重点項目として掲げ、「自己有用感を育む、学校・学級づくり」を推進している。さらに解説では、未然防止の視点として、「①規律 ②学力 ③自己有用感」の3点を示し、自己有用感を育てていくことの重要性を挙げている。

所属校は、今年度の学校経営方針に、「自己有用感を持った児童の育成に努める」ことを挙げている。2017年6月に実施したアンケートでは、「クラスの中の大切なメンバーの一人だと思っている」という質問に、「当てはまる」「やや当てはまる」と回答した児童は59%、「クラスの人を助けたり、みんなの役に立ったりしていると思う」が60%であった。一方、「クラスの人から『すごいね』『頑張っているね』と言われることがある」は67%、「クラスの人から『ありがとう』と言われることがある」は83%であった。これらの結果から、他者から認められたり、感謝の気持ちを伝えられたりする経験を多くの児童がしているにも関わらず、自分の存在価値や自己の有用性を十分実感するに至っていない児童もいることが分かった。

こうした現状や課題を踏まえ、児童の自己有用感を育てていくことは必要不可欠であると考え。自己有用感を育むためには他者との関わりが重要であり、その中で児童が自己の存在価値や有用性に気づき、実感できるようにしていくことが大切であると考え。そこで、本研究では、児童同士のより良い関わりを促す「ほっとブック」を作成し、活用することで、児童が自己の存在価値や有用性を実感し、自己有用感を育ていけると考え、本主題を設定した。

II 研究のねらい

「ほっとブック」の作成と活用を通して、児童同士のより良い関わりを促すことは、児童の承認感、学級への貢献や所属の意識を高めることにつながり、自己有用感を育ていけることを明らかにする。

III 研究の内容

1 基本的な考え方

(1) 自己有用感について

生徒指導リーフ増刊号「いじめのない学校づくり『学校いじめ防止基本方針』策定Q&A」では、

自己有用感を「単なる自己肯定感や自己存在感ではなく、相手からの好意的な反応や評価があって感じることでできる自己の有用性のこと」としている。つまり、自己有用感を獲得していくためには、他者との関わりが大変重要となってくる。更に言うならば、その関わりは温かで、安心できるものであることが前提となる。

本研究では、温かで、安心できる他者との関わりの中で、承認感や、誰かの役に立てた、役に立ちたいといった貢献の意識や、自分の存在価値を味わえる所属の意識を十分に感じることで、自己有用感を育むことに結び付いていくと考える。

また、自己有用感が育まれると、児童は他者を否定したり、攻撃したりすることが減り、相手のことを認められるようになってくる。これは、いじめの未然防止にもつながる。また、自己有用感を獲得することは、他者と関わろうとする意欲を高めるとともに、他者と関わるために必要な「ルールを守る」「人を傷つけない」といった、社会性の基礎を培っていくことにも有効である。

(2) 自己有用感を育む支援について

先述したとおり、自己有用感とは他者との関わりの中で児童が自己の有用性を十分に実感することで芽生え、育まれるものである。そのためには児童の承認感や貢献、所属の意識を育み、高めるような支援が求められる。これを「自己有用感を育む支援」と捉え、児童同士のより良い関わりを意図的・計画的に設定する。

(3) より良い関わりについて

児童同士のより良い関わりを促すには、その関わりがより深まるような支援をする必要があると考える。具体的には、互いに認め合う活動の中で、友達の小さなよさにも目を向けること、頑張りや良いところに対して賞賛や感謝の気持ちを言葉で伝え合うこと、一人一人のよさが友達やクラスのために活かされていると伝え合うことなどである。こうした取組を児童が積極的に、繰り返し実行することで、児童の中に互いに認め合うことや、賞賛や感謝の気持ちを伝えることが定着し、自然にできるようになると考える。そして、このような一連の流れを児童同士のより良い関わりと捉える。このより良い関わりを通して児童は「自分はみんなに認められている」「自分のよさが活かされている」「みんなの役に立ちたい」「自分はこのクラスに必要な存在なんだ」という自己への気付きを生み、自己有用感を育むことができると考える。

(4) 児童同士のより良い関わりを意図的・計画的に設定すること

児童同士のより良い関わりを促すには、自他のよさや存在価値を日々の学校生活の中で、児童同士が互いに意識し、認め、伝え合っていくことが大切である。本研究では、これらの活動を学級活動を中心に進めていく。そして、事前の活動、本時の活動、事後の活動を一連のまとまりとして捉え、それぞれの充実を図るようにする。

事前の活動では、自他のよさやみんなのために自分ができることを見付ける活動を設定し、「自分にはこんな良いところがあったんだ」「友達の新たな良い面を発見した」「クラスのために自分にはこんなことができる」など、自他のよさや貢献、所属の意識への気付きを促していく。

本時の活動では、自他のよさや頑張りや認め合い、賞賛や感謝の気持ちを伝え合ったり、学級での自他の役割を実感したりできる活動を設定する。そうすることで、児童が、「多くの友達から認められている」「自分がクラスの役に立っている」「自分にも友達にもたくさん良いところがある」という気持ちを持てるようにし、承認感や貢献、所属の意識を育んでいく。

事後の活動では、本時までの活動で得た、自他のよさや役割を積極的に生活の中で生かしたり、クラスで共有したりする活動を設定し、児童の承認感や貢献、所属の意識を高めていく。

こうした事前の活動から事後の活動までを一つのまとまりとして捉え、より良い関わりを意図的・計画的に設定することとし、繰り返し、継続して取り組んでいくことで児童の自己有用感が育まれていくと考える。

(5) 学級の中での実践について

児童にとって、学校生活の大半を過ごすのが「学級」である。だからこそ、学級における児童同士の関わりを基盤に実践を行うことは、担任が児童や学級全体の様子を常に把握しながら、互いに

認め合う活動を継続して、繰り返し実施することにつながり、一人一人の自己有用感を高めていくことに有効であると考えます。そこで、本研究では学級における児童同士により良い関わりを支援する活動の提案を行っていく。

2 研究構想図



3 教材の概要

(1) 「ほっとブック」の構成

「ほっとブック」は、主に学級担任が児童の自己有用感を育む支援を行うために活用する資料として作成した。「ほっとブック」を活用して学級活動を展開していくことで、児童同士が互いに認

め合い、自他のよさや自己の存在価値に気付き、承認感を得たり、学級や友達への貢献の気持ち、学級への所属の意識を感じたりすることができるように作成した。また、その構成は表1のとおり、「基本編」「実践編」から成る。

基本編では、自己有用感の捉えや、自己有用感を育むことがいじめ・不登校の未然防止につながることで、自己有用感を育むための担任としての児童への関わり方等を掲載し、自己有用感への基本的な理解を深められるようになっている。

実践編には、先行研究や関係文献を参考に作成した児童の自己有用感を育む七つの活動例を、学年の系統や内容別に紹介している。他者のよさを見付け、認め、賞賛し合う中で自他のよさに気付き、認め合えるようになる実践として「ほめほめ大作戦」「良いところさがし」「秘密の手紙」を掲載している。一方、自分のよさに目を向けた活動として「自分CMをかこう」を紹介している。また、学級での自分の役割や所属の意識を実感できる活動として、「今日のミッション」「あなたも、私もがんばるマン」を紹介している。さらに、学校行事と関連させ、互いのよさを見付け、認め合いながら、貢献、所属の意識を高めていける「みんなに拍手」を紹介している。どの活動も、「事前の活動」「本時の活動」「事後の活動」を一連の流れで示し、児童同士のより良い関わりを意図的・計画的に設定している。そして、これら七つの活動例を実践することで、児童が「自分はみんなに認められている」「自分のよさが学級で生かされている」「自分はこのクラスに必要な存在なんだ」「みんなの役に立ちたい」といったことに気付き、実感を得られるようにする。

各実践とも「活動の概要」「活動全体の流れ」「本時の展開例」「ワークシート活用法」「ワークシート」「その他の資料」を用意しており、担任が取り組みたい内容に合わせて実践を選ぶと、授業で必要なものが全てそろえることができる。そして、これらを活用することで、活動への理解を深め、活動を円滑に進めることができる。また、活動をより充実させるためのワンポイントアドバイス等も掲載した。さらに、デジタルデータ版も作成し、必要な資料を簡単に準備できるように配慮した。デジタルデータ版のワークシートなどは、市販の表計算ソフトやワープロソフトで作成してあるので、児童の実態に応じたアレンジも可能である。担任が、児童の実態に合わせて使いやすくアレンジすることで、より効果的な実践が展開できると考える。

(2) 「ほっとブック」を活用した活動の流れ

自己有用感を育むために以下のような流れで実践を進める。

	「ほっとブック」に掲載の資料	活動のねらい、内容
基本編	自己有用感とは等	自己有用感への理解を深める。
実践編		
事前の活動	活動の概要 活動全体の流れ ワークシート ワークシート活用法	事前、本時、事後のそれぞれの活動で児童がどんなことをするか、活動の全体像や流れをつかむ。活動の概要がつかめたら、事前の活動の流れ、ワークシートの使い方を確認し、事前の活動を実施する。
本時の活動	本時の展開例 ワークシート ワークシート活用法	本時の展開例を参考に、本時の活動の流れを計画し、実践する。ワークシートは活用法で使用方法を確認してから用いる。
事後の活動	振り返りカード ワークシート ワークシート活用法	ワークシートや振り返りカードを用いて進める。事後の活動が充実した活動になるように、本時の活動までで感じたことや、気付いたことを生かして取り組めるように、計画・設定する。

表1 「ほっとブック」の構成

基本編	①	自己有用感とは	
	②	自己有用感が育まれると	
	③	自己有用感を育み、高めよう	
	④	自己有用感を育むため	
実践編	7つの活動の		
	①	ほめほめ大作戦	〈各実践共通〉 ・活動の概要 ・活動全体の流れ ・本時の展開例 ・ワークシート活用法 ・ワークシート ・その他資料
	②	良いところさがし (友だちピンゴ編、フルーツ-シグ編)	
	③	秘密の手紙	
	④	自分CMをかこう	
	⑤	今日のミッション	
	⑥	あなたも、私もがんばるマン	
⑦	みんなに拍手		

(3) 実態調査の結果と考察

平成29年5月から6月にかけて、自己有用感に関するアンケート調査を研究協力校にて行った。結果は表2のとおりである。各問いに対して「当てはまる」「やや当てはまる」と回答した児童の割合をパーセントで示してある。

全体的には、各項目とも肯定的な回答が半数以上となっ

ている。特に『「ありがとう」を言われたことがある』に対しては、83%の児童が「当てはまる」「やや当てはまる」と回答している。また、『「すごいね」「頑張っているね」と言われたことがある』と答えた児童も67%となっている。こうした結果は、日頃から児童が互いのよさを認め、賞賛したり、感謝したりするという素地が形成されているためだと考える。

一方で、自分自身のことに関しては、互いを認め合うことができているにも関わらず、「認められている」と実感している児童の割合は56%にとどまっている。これは、承認感や、学級の中で貢献したり所属したりしているという実感をあまり得られていないからであると考えられる。また、全体的な特徴として、学年が上がるにつれてどの項目も割合が低くなっていることが挙げられる。特に「自分のことが好き」や「みんなの役に立っている」という項目に関しては、高学年は半数に満たない結果となっており、学年が上がるほど、自己有用感が下がってしまう傾向にあると考えられる。

以上の結果から、次のような支援を行い、児童の自己有用感を育んでいくこととした。

一つ目は、すでに多くの児童が身に付けている、友達を賞賛したり感謝したりする態度をより育てていくことである。そのために、日頃から、友達の良いところを見付け、賞賛や感謝の気持ちをより具体的な言葉で伝える機会を増やし、自他のよさへの気付きにつながるようにした。

二つ目は、既知の自他のよさや得意なことを見つめ、それらを再認識できるようにするとともに、新たな自他のよさへの気付きを促すことである。「自分（〇〇さん）にはたくさんの良いところがある」「自分（〇〇さん）は△△を頑張っている」「これなら誰にも負けない」「自分（〇〇さん）のよさはこんな場面で生かせる」といった思いを児童が十分に実感できるようにした。

三つ目は、学年に応じて繰り返し、計画的に自己有用感を育むための活動に取り組みさせることである。6年間を見通し、計画的、継続的に児童が自他のよさに気付き、認め合う活動を設定していくようにした。

以上のことを受け、児童が自他のよさを見付けたり、認め、賞賛し合ったりする活動を意図的・計画的に取り入れ、児童同士が承認感や、学級への貢献、所属の意識を高められるように支援をすることで、自己有用感を育むことができると考える。

表2 自己有用感に関する事前アンケートの結果（％）

	3年	4年	5年	6年	全体
自分のことが好き	78	79	35	47	64
自分はクラスの大切なメンバーだと思っている	64	63	52	52	59
クラスの中で認められている	51	58	54	58	56
クラスの人を助けたり、みんなの役に立ったりしている	67	69	59	44	60
クラスの人から「すごいね」「頑張っているね」と言われたことがある	74	70	69	61	67
クラスの人から「ありがとう」と言われたことがある	86	83	79	81	83

IV 研究の計画と方法

1 実践の概要

児童同士が、学級の中でより良い関わりを築き、互いのよさを認め合う中で、自己有用感を高められるように、「ほっとブック」を活用した実践を以下のような計画で行った。

調査、作成、実践等	時期	方法、その他
学級の実態調査（「C&S質問紙」、「アセス」）	5月～12月	年3回実施する
実践（事前の活動・本時の活動・事後の活動）	7月～11月	2年生から5年生で実践する
自己有用感に関する調査	6月～11月	自己有用感に関するアンケートで実践前後の変容を見取る
「ほっとブック」の作成	6月～1月	

2 授業実践の内容





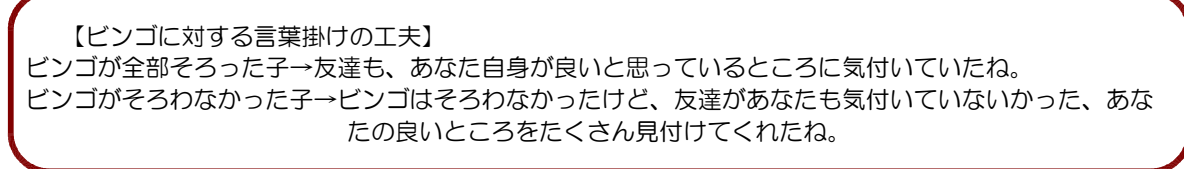


実践名、実施学年 ㊦ねらい	実践内容： ㊦事前の活動 ㊦本時の活動 ㊦事後の活動
「ほめほめ大作戦」(2年生) ㊦ 児童が互いを認め合うことのよさを実感し、より良い方法で互いのよさを伝え合えるようにする。	㊦ 友達の良いところを見付ける。 ㊦ 褒められるとどんな気持ちになるか考える。褒めるロールプレイをする。 ㊦ 友達の良いところを見付けて褒める。
「今日のミッション」(2、3年生) ㊦ ミッションに取り組むことを通して、貢献や所属の意識を高めるとともに、互いの頑張りを認め合う態度を養う。	㊦ クラスをより良くするミッションに取り組む。 ㊦ ミッションの意義を考える。 ㊦ クラスをより良くするという意識を持ってミッションに取り組むとともに、互いの頑張りを認め合う。
「あなたも、私もがんばるマン」(3、4年生) ㊦ より良いクラスにするための取組を振り返り、共有することで、クラスの中での自分の役割を自覚できるようにするとともに、クラスのために貢献できることを進んで考え、実践できるようにする。	㊦ より良いクラスについて考え、良いクラスにするために自分ができることに取り組む。 ㊦ 自分が取り組んできたことを紹介し合う。 ㊦ クラスを良くするために、グループや係でできることに取り組むとともに、その頑張りを認め合う。
「良いところさがし」(3、4年生) 1 ブレーンストーミング 2 友だちビンゴ ㊦ 自分のよさに気づき、それらを学級生活で生かしたり、友達のよさを見付け、認めたりできるようにする。	㊦ 友達の良いところを見付ける。 ㊦ 1 友達の良いところをたくさん出し合って、交流する。 2 友達の良いところを集めてビンゴをする。 ㊦ 友達の良いところを見付け、伝え合う。
「自分CMをかこう」(5、6年生) ㊦ 自分のよさをたくさん知り、それらを学級生活の中で意欲的に生かしたり、伸ばしたりしていくようにする。	㊦ 自分の良いところを探す。 ㊦ 自分の良いところを伝えるシートを書き、交流する。 ㊦ 自分の良いところを生かしていくとともに、友達の良いところを見付け、伝え合う。
「秘密の手紙」(5、6年生) ㊦ 友達のよさを見付け賞賛したり、励ましたりできるようにするとともに、自分のよさを知り、生かしていこうとする態度を養う。	㊦ 対象の友達の良いところを探す。 ㊦ 対象の友達に賞賛や励まし、感謝の手紙を書く。 ㊦ 対象の友達を変えて、良いところを見付け、手紙を書く。
「みんなに拍手」(6年生) ㊦ 運動会での互いの頑張りを見付け、認め合うことを通して、自他のよさに気づきそれらを生かしたり、伸ばしたりしていこうとする態度を養う。	㊦ 運動会に向けて、団ごとに互いの良いところを探す。 ㊦ 運動会後、団のメンバーに賞賛やねぎらいのメッセージを伝える。 ㊦ 普段の学校生活の中でも、互いの良いところを見付け合う。

3 検証計画





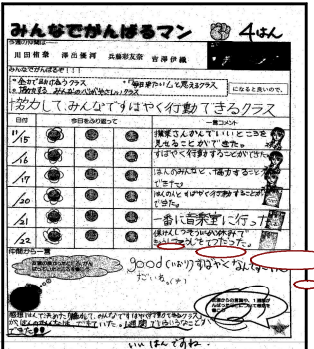
検証の視点	方法
児童同士のより良い関わりを促す「ほっとブック」は、学級担任が、児童の自己有用感を育むために活用する資料として有効であったか。	<ul style="list-style-type: none"> ・実践に取り組む児童の様子を観察する。 ・ワークシートへの記述から考察する。 ・児童、教職員へのアンケート調査を行い、結果を分析する。 ・教職員への聞き取りを行う。
学級活動を事前の活動から事後の活動まで、意図的・計画的に実践していくことは、児童同士のより良い関わりを促し、承認感や貢献、所属の意識を高め、児童の自己有用感を育むことに有効であったか。	

4 実践

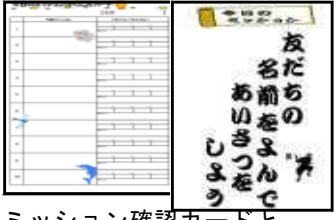
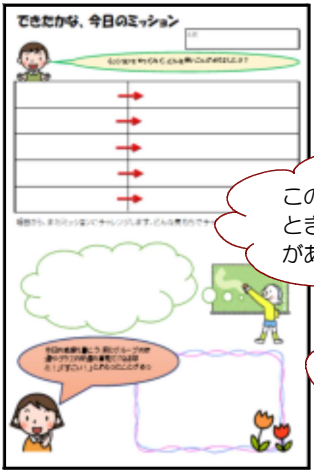
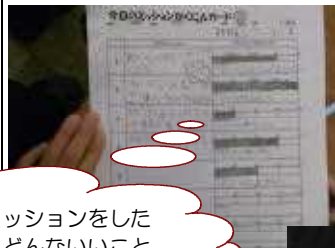

(1) 良いところさがし（友だちビンゴ）（3・4年生）

	「ほっとブック」	主な学習活動と児童の様子	教師の気付き
事前の活動	 友達の良いところを探して記入するワークシート	○隣の友達の良いところを探して、ワークシートに記入する。 「教室掃除で、机をいっぱい運んでいた」 「話をしている人の方を向いて聞いていた」 「手紙を配ったときにありがとうと言ってくれた」	○「良いところは、なるべく具体的に記入する」「誰も気が付かないような良いところを探す」といった声掛けをしたことで、充実した良いところさがしになった。
本時の活動	 コメントなどが書かれたビンゴシート	 ○友達に、事前に見付けた良いところを伝えてもらい、ビンゴシートをチェックする。  ○ビンゴシートに自分の良いところや頑張っていることを記入。 掃除を頑張っていたよ。	○自分が思っていた以上に、たくさん良いところを言ってもらえて、充実感を得られていた。 僕も書いた！ビンゴだ！
	 【ビンゴに対する言葉掛けの工夫】 ビンゴが全部そろった子→友達も、あなた自身が良いと思っているところに気付いていたね。 ビンゴがそろわなかった子→ビンゴはそろわなかったけど、友達があなたも気付いていなかった、あなたの良いところをたくさん見付けてくれたね。	 ○感想を記入して、グループでシェアリングする。 ここに書いてある以外でも、良いところがあるよ。 あるある、昨日も大きい声で挨拶してたよね。 ありがとう。	○隣同士だけでは出てこなかった互いの良いところを、グループで更に出し合えた。 ○良いところがたくさん見付き、満足している児童が多かった。
事後の活動	 ブレーンストーミング編で使ったワークシート	○相手を変えて、良いところさがしを実施したり、互いのよさを伝え合う時間を設けたりする。 ○良いところ発見カードを掲示する。 ○良いところさがし、ブレーストーミング編を実施しても良い。	○良いところさがしを継続して行うことで、小さな良いところに気付いたり、承認や賞賛の言葉がより良いものになったりするなどの充実が見られた。 ○日常生活でも「すごいね」「上手だね」などの褒めたり、認めたりする姿が見られるようになった。

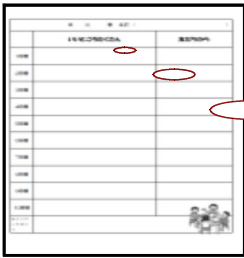
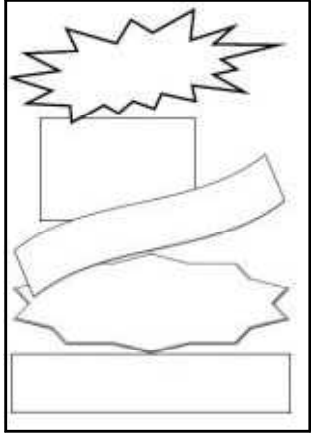


(2) あなたも、私がんばるマン(3、4年生)

	「ほっとブック」	主な学習活動と児童の様子	教師の気付き
事前の活動	 <p>自分が取り組んだことを振り返るワークシート</p>	<p>○より良いクラスとはどんなクラスか、考える。 「毎日来たいと思えるクラス」 「全力で助け合うクラス」 「優しくて、協力できるクラス」</p> <p>○より良いクラスにするために、自分ができることに取り組む。</p> <p>困っている友達に声を掛ける。 給食の時、普段あまり話さない子と話をする。</p>	<p>○学級目標を確認し、クラスの状態と照らし合わせる中で「クラスをより良くしたい」という意識が高まっていった。</p> <p>○1日の振り返りのときに、隣同士で交流したことで、互いの頑張りを認め合えた。</p>
<p>【本時のねらい】</p> <p>より良いクラスにするために取り組んできたことを振り返り、共有することを通して、クラスの中での自分の役割を自覚できるようにするとともに、クラスのためにできることを更に考え、実行できるようにする。</p>			
本時の活動	 <p>自分の頑張りを伝える がんばるマンカード</p> <p>たくさん頑張ってるね。すごいよ!</p> <p>「毎日来たい」と思えるクラスにするために、朝来たら「おはよう」のあいさつを進んでします。</p>	 <p>○自分の取組をがんばるマンカードに記入して、紹介する。</p> <p>○がんばるマンカードをグループで共有し、互いに賞賛や励ましのメッセージを付箋に書く。</p> <p>友達と助け合って、いいね!</p> <p>大きな声で、全力で歌えてたね。</p> <p>○グループで頑張ることを決める。</p> 	<p>○事前の活動に、意欲的に取り組んでいたのが、がんばるマンカードも記入しやすく、吹き出しが足りない児童もいた。</p> <p>○担当が机間支援で良いところを認めたり、全体に紹介したりしていたので、グループ活動でも互いを認め合う言葉がたくさん聞かれた。(担当が手本になっていた)</p> <p>○グループでの共有の後、クラス全体の共有の時間を設けたことで、更に多くの友達から認められ、充実感を得られた。(認め合う経験が大事)</p>
事後の活動	 <p>グループで課題を決めて取り組むためのワークシート</p>	<p>○学級活動で決めた、グループでのがんばるマンに挑戦する。</p> <p>○振り返りをしながら、互いの頑張っていたところや、良かったところを伝え、賞賛し合う。</p> <p>○班を変えたり、掃除や給食のグループ、係など、様々な集団で継続して取り組む。</p> <p>いろいろ頑張れて、役に立てて良かった。</p> <p>みんなと助け合いながらクラスで過ごせて楽しかった。</p>	<p>○グループで話し合って決めたがんばるマンだったので、「みんなで」「協力できた」という意識を持つ児童が多く、貢献や所属の意識が高まった。</p> <p>○様々な場面でクラスを良くするために協力したり、積極的に声を掛け合ったり、役割を果たそうとしたりする児童の姿が見られるようになった。</p>

(3) 今日のミッション (2、3年生)

	「ほっとブック」	主な学習活動と児童の様子	教師の気付き
事前の活動	 <p>ミッション確認カードと、 掲示用「今日のミッション」</p>	<p>○毎日一つのミッションにチャレンジする。 ○帰りの会で、ミッションについて振り返る。</p> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px;"> <p>【ミッションの一例】</p> <p>「1時間に1回、手を挙げよう」 「当番の仕事を頑張ろう」 「昨日より3分早く、掃除を終わらせよう」</p> </div>	<p>○「ミッション」にチャレンジするということが、児童の意欲を喚起し、ほとんどの児童が、熱心に取り組めた。</p>
本時の活動	 <p>本時のワークシートで、事前にチャレンジしてきたミッションの意義や、ミッションをするとどんな気持ちになるかを考えた。 また、本時の振り返りもこのワークシートで行った。</p>	 <p>○ミッションを振り返り、ミッションの意義について考える。</p> <p>このミッションをしたとき、どんないいことがあったかなあ。</p> <p>あいさつをすると、友達もあいさつを返してくれてうれしかった。</p> <p>普段あまり話さない友達とも話せたなあ……。</p> <p>○グループで意見を共有し、ミッションの意義を確認する。</p> <p>苦手なミッションも、毎日心掛けていたら、いつか自然とできるようになるから、どんどん挑戦してみたい。</p> <p>係の仕事を頑張ると、クラスみんなが良い気持ちで過ごせるよ。</p>	<p>○低学年は「ミッションの意義」という言葉が難しかったので、ミッションをするとどんな良いことがあったか、先生がどうしてこのミッションにチャレンジさせたかといった問い掛けをした。その結果、ミッションをすると、クラスが良くなることに気付いた児童が多かった。</p> <p>○クラスを良くするためにミッションに取り組んだという意識が高まり、事後の活動への意欲につながった。</p> <p>○ミッションに頑張っ取り組んだことを互いに認め合ったことで、貢献や所属の意識が持てた。</p>
事後の活動	 <p>事後の活動後に使用する振り返りカード</p>	<p>○「今日のミッションその2」に取り組む。(事前の活動で使用したワークシートの後半部分を使う)</p> <p>○1週間ミッションに取り組み、振り返る。</p> <p>○頑張っていた友達を紹介し合う。</p> <div style="border: 2px solid green; padding: 10px; margin-top: 10px;"> <p>自分たちで新しいミッションを考えても良い ↓ 「あなたも、私もがんばるマン」につなげられる ○事後の活動に、「あなたも、私もがんばるマン」を実践したクラスは、自分たちのクラスをみんなでより良くしようという意識が高まっていた。</p> </div>	<p>○「クラスのため」「みんなが気持ち良くなる」といったことを意識して取り組めるようになった。</p> <p>○互いの頑張りを認め合うことで、承認感も得られた。</p> <p>○当番や係の仕事等様々な場面で、クラスを良くするという意識を持って活動できる児童が増えた。</p>

(4) 自分CMをかこう (5、6年生)

	「ほっとブック」	主な学習活動と児童の様子	教師の気付き
事前の活動	 <p>自分の良いところを書きためていくワークシート</p>	<p>○毎日自分の良いところを探して、記入する。</p> <p>○「友達から」の欄に、隣や班の友達からサインやコメントをもらう。</p> <p>委員会で、大きな声で発表している。</p> <p>進んで配りものを手伝った。</p> <p>掃除が丁寧にできた。</p>	<p>○自分の良いところを見付けることに苦手意識を持っている児童が多かったので、担任が良いところを見付けて伝えると、うれしそうにしていた。</p> <p>○具体的に記入すると次の活動に取り組みやすい。</p>
<p>【本時のねらい】</p> <ul style="list-style-type: none"> 自分のよさを知り、学校生活の中で生かしていけるようにするとともに、自分から進んで、友達のよさを認め賞賛したり、励ましたりする態度を養う。 			
本時の活動	 <p>自分の良いところをアピールするワークシート</p>	 <p>○自分CMを書き、グループで、紹介し合う。</p>  <p>一人で終えることができない仕事や、困っていて仕事ができないとき、いつでも話しかけてください。</p>	<p>○事前の活動で自分の良いところを見付けていたので、活動に取りかかりやすかった。</p> <p>○自分CMを書いている最中も互いに「〇〇さん他にもこんな良いところがあるよ」「△△が得意だから、手伝うよ」といった言葉が聞かれるなど、自分のよさを生かしたり、貢献したりしたいという意欲が見られた。</p> <p>○付箋で認め合う場面では具体的な賞賛や、「□□してくれてありがとう」のような感謝の言葉掛けが自然に行われていた。</p>
事後の活動	<p>【児童の言葉 (付箋より)】</p> <ul style="list-style-type: none"> 仕事を頼まれるのは、責任感があるからだと思います。 いつも全力でがんばっていて、見習いたいです。 心遣いができるNo. 1だね。クラスの中でも思いやり1番だね。 裁縫名人！今度教えてね。 いつも笑顔でいられることがうらやましいです。これからも頑張ってね。 いつも人のために努力している姿を見習いたいです。 自分が困っているときも、助けてね。 		<p>○自他を認め合ったり、賞賛し合ったりする活動を継続して行うことで、友達との関わりが増えたり、具体的に認め合う姿が見られたりするなど、より良い関わりができるようになった。</p> <p>○教室に掲示することで、より多くの友達に認められ、承認感や所属の意識が高まった。</p>
		<p>○掲示された自分CMカードを見て、みんなでそれぞれのよさを共有したり、良いところを更に発見したり、メッセージを書いたりする。</p> <p>○帰りの会等で自他の良いところがしを継続して行う。</p>	

V 研究の結果と考察

1 「ほっとブック」の有効性について

所属校で、実践後の学級担任にアンケートを実施したところ、図1のような感想が挙げられた。また、「今後『ほっとブック』を使ってみたい」と全員が回答した。これは、「ほっとブック」の実践編で、一つ一つの活動を「実践の概要」「活動全体の流れ」「本時の展開例」「ワークシート活用法」「その他資料」で構成したことで、学級活動を意図的・計画的、かつ円滑に進めることができ

- 自分には良いところがないと思っていた子が、友達から褒められて、「こんな風に思われていたんだ」と、自分に対して肯定的な感情を持たた。
- 自分では気付けなかった良い点を、他者から言ってもらえることが多かったので、自分に自信を持つことができた児童が多かった。
- ワークシートに支援の視点が書いてあったので使いやすかった。
- 子どもたちは事前の活動で良いところを記入していたので、本時の活動に取りかかりやすかった。
- 本時の展開例があったので、進めやすかった。
- 繰り返し実践していくことで、子どもたちが「褒め方」「認め方」を身に付けていくことができた。

図1 担任の感想より

たからであると考え。特に、ワークシートは、実物を見ただけでは使い方が分かりにくい点も「ワークシート活用法」で詳しく説明したので、担任が使い方を十分に理解して使用することができた。また、「活動の流れ」や、「本時の展開例」などに記したワンポイントアドバイスは、授業を進めるに当たり、特に若手の担任にとって参考になったようである。こうしたことが、「ほっとブック」の活用のしやすさに結び付いたと考える。

また、担任へのアンケートからは児童の自己有用感に関する見取りとして、「自分に対して肯定的な感情を持たた」「自分に自信を持たた児童が多かった」「児童の自信につながった」「自分もクラスの一員だということを再確認できていた」といった回答も得られた。このことから「ほっとブック」が児童の自己有用感を育てるために活用する資料として、有効であったと考える。

2 児童の自己有用感について

(1) 学級活動を、事前から事後の活動まで意図的・計画的に実践していくことについて

事前の活動については、担任から、「事前に、良いところ探しで積み重ねがしてあると、学級活動でも、良いところが見付きやすくて、本時が有効だと感じた」「事前に自分の良いところをワークシートに記入し、それを基に考えることができたので、『自分CM』に取りかかりやすかった」といった感想を得られた。児童も事前の活動を充実させたことで、本時の活動にスムーズに取り組む姿が見られた。実際に、「良いところさがし」では、事前で見付けた友達の良いところを基に、ワークシートの枠内に収まりきれないくらい自他の良いところを書き出したり、伝え合ったりする児童が多く、充実した活動が展開できた。そして、「たくさん良いところを見付けてもらって（見付けられて）うれしかった」といった児童の言葉に代表されるように、自他のよさへの気付きや、友達から承認されることへの喜びに結び付いた。

また、「あなたも、私がんばるマン」では、クラスを良くするために、事前の活動は個人で課題を決めて取り組み、本時でその頑張りを互いに認めたり、賞賛したりする活動を行った。続けて、事後の活動ではクラスを良くするために、グループで課題を決めて取り組んだ。その結果、図2の感想のように、児童同士の関わりが深まったり、貢献の意識が高まったりした感想が得られた。また担任からは、「事後の活動を充実させることで、授業の中での取組を自然な形で日々の生活に移行していけるので、児童の『自分から進

【「あなたも、私がんばるマン」事後の活動の感想】

- みんなで素早く協力して行動すると、たくさんことができると分かった。
- 3班全員が頑張っていて、これからも頑張ろうと思える。
- みんなで決めた目標を、みんなで頑張れて楽しかった。
- いろいろ頑張れて、役に立てて良かった。
- 班で決めた「協力して、みんなで素早く行動する」について、1週間いろいろなことができた、班のみんなはできていた。

図2 児童の感想より

んで』という気持ちを引き出すこともできた」という声が聞かれた。

こうしたことから、事前から事後までの一連の活動を、意図的・計画的に実施していくことで、児童同士のより良い関わりを促し、承認感やクラスへの貢献、所属の意識を確実に培っていくことができたと考える。

(2) 児童の承認感や貢献、所属の意識の変化について

自己有用感に関するアンケートで実践の前後での比較を行った。

いずれの項目も、多少の差はあるものの、事後の方の数値が伸びている。事前のアンケートから互いのよさを認め合う素地が育っている児童が元々多かったが、本研究の実践を通して、計画的に継続して他者のよさを認めたり、賞賛したりすることを繰り返していくことで、「友達の良いところをもっと見付け、伝えよう」という意識がより高まった結果と考える。さらに、認め合う機会が増えたことで、児童は、「友達が、自分の良いところを見付けてくれた」「みんなから認められている」という承認感を十分に得られた(図3-1)。

また、「今日のミッション」や「あなたも、私もがんばるマン」では「クラスをよくするために」ということを意識しながらミッションや、課題に取り組んできた。同時にその取組を互いに認め合うことも実践してきた。こうした「自分の頑張ったことが周りに認められる」という経験や、「自分が頑張るとみんなが気持ち良くなる」という実感が、児童の意欲を高め、更に「良くしよう」「みんなのために」という意欲に結び付いていったと考える(図3-2)。

今回のアンケート結果で最も大きく変化したのが、所属に関する質問である(図3-3)。

本研究では、どの実践にも「互いに認め合う」機会を多く取り入れてきた。その分、児童は自分が認められる機会も増えた。また、互いに付箋などで承認や賞賛、感謝のメッセージを伝えたり、手紙や頑張りカードを送ったりする活動をとおして、自分の存在が大切にされているという実感を得ることができ、自己存在感の高まりへとつながったと考える。

また、同アンケートの学年ごとの結果からは、6年生では、「『すごいね』『頑張っているね』と言われたことがある」児童が61%から70%、「クラスの人を助けたり、みんなの役に立ったりしている」と感じている児童が44%から53%に変化した。「秘密の手紙」で、秘密の相手から良いところを伝える手紙をもらったり、「みんなに拍手」で、運動会での頑張りを伝え合ったりした。こうした経験から自分が認められているという実感を得るとともに、みんなのために何かをすることの大切さを知り、役に立ちたいという気持ちが児童に芽生えたと考える。

5年生では、「自分CMをかこう」を実施したことで、自分のよさに気付いたり、そのよさを認められるうれしさを実感したりする児童が多かった。その結果が、「自分のことが好き」と思える児童が35%から45%、「自分には良いところや自慢できるところがある」と実感している児童が64%から69%という数値の変化に表れていると考える。

3年生では、「良いところさがし」を実施したことで、「クラスの中で認められている」と感じ

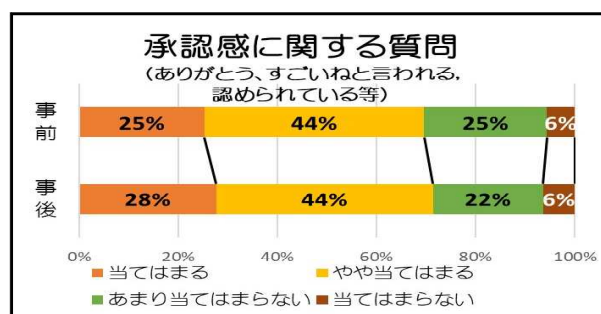


図3-1 承認感に関する結果

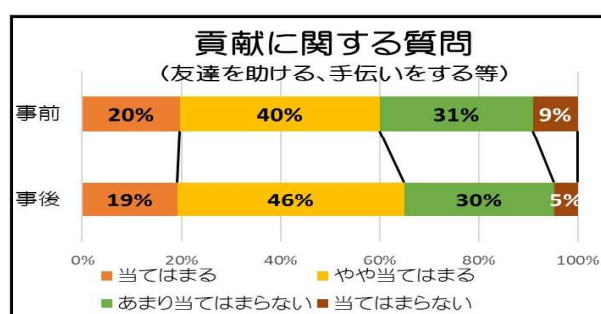


図3-2 貢献に関する結果

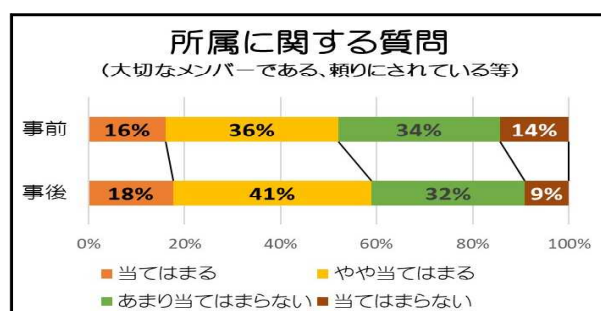


図3-3 自己存在感に関する結果

ている児童が51%から56%に変化した。この変容は、「良いところさがし」に加えて、「今日のミッション」で名前を呼んで挨拶をしたり、クラス全員の友達と話をしたり、授業中、進んで発言しようとしたりするミッションに繰り返し取り組んだことで、互いの存在を意識し、認め合えるようになったことも関係していると考え。

以上のことから、本研究を通して児童の承認感や所属、貢献の意識を高め、自己有用感を育んでいくことができたと考える。

VI 研究のまとめ

1 成果

- 「ほっとブック」を担当が活用することで、児童は自他のよさを認め、伝えたり、賞賛したりする経験を重ね、他者やクラスのために自分にできることに取り組もうという意欲が高まった。こうした経験を積むことで、児童同士のより良い関わりを促すことができた。
- 事前の活動、本時の活動、事後の活動を一つのまとまりとして意図的に計画し、継続して実施していくことで、児童同士のより良い関わりを促すことができた。それは、自他への新たな気付きや賞賛、感謝の気持ちを生み、児童の承認感や貢献、所属の意識を高めることに有効であり、児童の自己有用感を育むことにつながった。
- 「ほっとブック」は、「活動の概要」「活動の流れ」「本時の展開例」「ワークシート活用法」等を掲載しているので、担任が、児童の実態に合わせて選んだり、必要に応じてアレンジしたりして活用することができ、児童の自己有用感を育み、高めていくための資料として有効であった。

2 課題

- 事前及び事後の活動を継続して行っていくための時間を、毎日の学校生活の中で確保していくことが望まれる。なるべく短時間で、効率的に充実した活動を提案するとともに、ワークシート等の更なる工夫が必要である。
- 児童の自己有用感を育んでいくためには、それぞれの学年での、事前から本時の活動、事後の活動の一連の流れ、学年の系統を明確にし、つながりや発展性を考えた継続的な取組を計画していくことが重要である。

VII 提言

児童の自己有用感を高めるためには、児童同士のより良い関わりを意図的・計画的に設定し、互いのよさを認め合う場面をたくさん作り、児童の承認感や貢献、所属の意識を高めていくことが大切である。

<参考文献>

- ・『生徒指導提要』（2010） 文部科学省
- ・『生徒指導リーフ』『生徒指導リーフ増刊号 いじめのない学校づくり』 国立教育政策研究所
- ・『平成29年度学校教育の指針（解説）』（2017） 群馬県教育委員会
- ・栃木県総合教育センター
『高めよう！自己有用感 栃木の子どもの現状と指導の在り方』 栃木県総合教育センター（2013）
- ・河村 茂雄・品田 笑子・藤村 一郎 編著
『いま子どもたちに育てたい 学級ソーシャルスキル 小学校 低学年』 図書文化社（2007）
『いま子どもたちに育てたい 学級ソーシャルスキル 小学校 中学年』 図書文化社（2007）
『いま子どもたちに育てたい 学級ソーシャルスキル 小学校 高学年』 図書文化社（2007）

<担当指導主事>

野原 亮 西田 麻規